

『沙石集』論

——円照入寂後の戒壇院系の学僧たち——

はじめに

東大寺円照に師事した戒壇院系の学僧たちは、円照入寂（建治三年（一二七七））後の状況（たとえば金山院などに経済的な支援を惜しまなかった檀那たちが次々と離れるなど）の中で各々京洛・南都や紀州・尾州などの地方（その弟子筋の周辺〈禅意・是本、そして無住など〉をも想定するならば、奥州・関東、さらには鎮西・海彼までを覆う。東アジア域を巻き込んだ動きとも無縁ではない）へ拠点を移しつつ、遁世上人としての「活動」を継続していたようである。家原寺の思融、白毫院の円光上人良含、室生寺の空智上人忍空などは、典型的な例であろう。

凝然へ継承された円照の遁世上人としての姿勢は、東大

牧 野 和 夫

寺の伝統的な「華嚴学」継承の方向が顕著になるにつれ、戒壇院において凝然以降へ引き継がれることはなかったのではないか（日本華嚴学史の新しい研究の展開が注目される。藤丸要氏「鎌倉期における東大寺華嚴」『鎌倉期の東大寺復興―重源上人とその周辺』（2007）、野呂靖氏「日本華嚴における三生成仏説に関する諸師の見解」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』28号（2006）他）。

円照門下の円光上人良含と空智上人忍空、その具体的な活動の痕跡を蒐集し、その切片の継ぎはぎの作業の結果、自ずと浮かびあがる遁世僧（その手沢本類〈典籍〉のネットワークがおぼろげながら存在するのである。特に、遁世上人の円光上人良含が戒壇院系の重要な一人と確認できたことで、新たな展開が拓けることになった。

ここにこの「良含・忍空」と縁をもつ良胤・最盛をとりあげ、西大寺系の律とは異なった流れに即した通世僧の活動を拾い上げ、その活動の切片にふれる無住の「記述」を、円爾弁円の影響の色濃いとされる『沙石集』に探ることにする。円爾・円照入寂後にも展開した個々の通世上人における「緩やかな」授法という師資相承のネットワークこそが『沙石集』撰述（生成）のある一面を端的に示しているのではないか、と思われるからである。

一、上宮王院・恵巖

加賀元子氏が『中世寺院における文芸生成の研究』（汲古書院、平成15年1月、初出は「無住と法隆寺僧恵巖」〈『國語と國文學』七七卷八号〉）において「西大寺本「裏書」の無住の徳治三年五月法隆寺参籠の事実は従来の無住伝記研究では指摘されておらず、本「裏書」は無住伝の空白を埋める資料」（一三〇頁）として紹介された西大寺蔵『妻鏡』に合綴される『沙石集』巻四下裏書抜書の本奥書識語には、次のように記されている。

居住シテ被遣廿一日ニ為恵巖注裏書而被送之／
愚身之面目也

「裏書」本奥書から徳治三年の法隆寺参籠の途次における恵巖との交流が知られる。青壮年期（律の修学や菩提山正暦寺への遊学など）の頃の無住を考慮すれば、『沙石集』や『雑談集』に多くの南都関連の説話記事が認められることも不思議ではなく、恵巖とも旧知の間柄であったか、との推測も可能なのである。『雑談集』卷十「神明慈悲ノ事」によれば、法隆寺・中宮寺参籠と信如の「物語」を書き留めており、『雑談集』のこの一話を検討し、細川涼一氏は「信如の最晩年の消息を伝えるもの」とされる。加賀氏も加えて「最晩年の信如と無住との親しい交わりを窺うことができる。没年未詳の信如は弘安五年に七十二歳であったことは確認されており、この年無住は五十七歳である。」と注意を喚起したのである。加賀氏は、この恵巖について二点の文献資料を提示された。

ひとつは徳島県真言宗本願寺蔵『聖徳太子伝暦』二卷二冊（国立奈良博物館寄託）の上巻末書写奥書である。

「乾元二年^{癸卯}四月廿六日於法隆寺西室第六坊申時許／書
寫了筆□（師カ）恵巖／為出離生死頓証菩提乃至法界／
衆生平等利益耳」

無住上人此徳治三年居^{戊申}五月法隆寺参籠之次／
恵巖対面借請此書彼上人六月上旬ニテ桃尾ニ／

とあり、乾元二年（一三〇三）法隆寺西室で『聖德太子伝暦』を書写した、とする資料である。

いまひとつは、法隆寺僧訓海著『太子伝玉林抄』所引の『法隆寺宝物和歌』の本奥書である。

本云于時嘉元三年〔壬十二月廿日於法隆寺／東院書了執筆僧惠嚴法師此書写／是第三伝云々／

文安五年戊辰二月卅日是一本書也為恐向後ノ失墜此伝抄之中ニ書入之 訓海六十三／

とあり、惠嚴は嘉元三年（一三〇五）十二月二十日に法隆寺東院において『法隆寺宝物和歌』を書写しているのである。『聖德太子伝暦』書写の乾元二年も『法隆寺宝物和歌』書写の嘉元三年も、無住参籠時の徳治三年（一三〇八）の五年乃至三年前に相当する。加賀氏は法隆寺側の文献資料を検討され「たしかに、惠嚴は記録には見えない」といわれる。

惠嚴が乾元二年（一三〇三）に『聖德太子伝暦』を書写した法隆寺西室は法隆寺の西室であるが、嘉元三年（一二〇五）十二月二十日に『法隆寺宝物和歌』を書写した法隆寺東院は、「上宮王院」とも称されていた「法隆之側」の寺院であった。林幹彌氏『太子信仰の研究』（昭和55年2月、吉川弘文館）などに拠れば、貞観の昔から上宮王院を「法隆寺東院」と呼んだことが知られている。

さらに、「藤原為家の御子左流から離脱し、歌道の一派

を建てた藤原光俊、真観の息、定円が法隆寺宝物拝観の折に作歌し、同寺舍利殿に奉納した『法隆寺宝物和歌』と加賀氏の指摘する通り『法隆寺宝物和歌』は真観の息の定円の手によって「上宮王院」の舍利殿に奉納されたのである。定円についての近年の研究成果（とくに藤本孝一氏『本を千年つたえる』（朝日新聞出版 2010・10）第四章「対立する家から入った本（二）——三井寺本・真観本——」参照）を加えて勘案すると、定円の「法隆寺宝物拝観」と作歌、さらに上宮王院の舍利殿への奉納という営為は、おそらく時期的に見ても円照の戒壇院・金山院を拠点に授法・講義などに多忙を極めた活躍期にあたり、靈山院と上宮王院とを結ぶ戒壇院系の「遁世上人」間の緊密な連関のなかで行われた一連の「仏事」であった、と見るべきである。円照と靈山院については、牧野「思融—良含」周辺のこと・杭州出自の宋人のこと」（『実践国文学』80号、2011・3）、円照戒壇院門下と延慶本『平家物語』については、牧野「延慶本奥書・応書写『平家物語』四周の書物ネットワーク」（『軍記と語り物』48号所収予定）を参照したい。円照門下の宗性と定円との交流の契機にも、戒壇院系の靈山院の僧としての定円の位置を考慮すべきである（詳細は別稿）。山崎誠氏のご指摘に加えて、弘長・文永頃の靈山院と戒壇院系の学僧との緊密な連関にも目を

配るべきであろう。

上宮王院である法隆寺東院は『圓照上人行狀』中に拠れば、「人王第八十九代禪林寺法王踐祚之時、文応元年庚申□□〔住力〕持法隆寺上宮王院、興行戒律、安置僧□、後讓之宝金剛院英舜大德、安置門侶、興行連統、」とある。惠巖が嘉元三年（一三〇五）十二月二十日に定円撰『法隆寺宝物和歌』を書写したところこそ上宮王院である法隆寺東院であった（細川涼一氏「法金剛院導御の宗教活動」『中世の律宗寺院と律宗』〈吉川弘文館、1987〉）。さらに、「弘長季曆、泉州家原寺弘法大德、以彼寺院、施与照公、彼所者、行基菩薩降生之砌、菩提即彼処建立伽藍、菩薩行化根本之所、彼寺院主婦上人德、以施与之、即安僧侶、建興仏宗、上人後□□〔讓之〕勝鬘院圓珠上人、彼之門人、于今興□、□通密教、敷演台宗、……（中略）……如是等僧俗男女諸大檀那、並是受戒弟子、祈禱親好者也、其管領処、惣有九寺、戒壇院・竹林寺・善法寺・金山院・法隆之側上宮王院・家原寺・八幡大乘院〔後作他／人管領〕・德大寺之内大悲院・東大寺内知葦院是也、在生之間、管領提接、隨其宜縁、各付門人、於元興寺、勸建僧房、長日談義、于今不絶、…仍照公上人、以知足院、委付爾公、令興行之、圓学〔覺〕上人雖非受戒弟子、化導興隆、偏投照公門下、仍以上宮王院、付之令興、」と『行狀』は記す。

『圓照上人行狀』は下の奥書によると凝然六十三歳の時、正安四年（一三〇二）三月に自撰し自ら記したものである。上宮王院である法隆寺東院は、文応元年（一二六〇）以降、「住力」持法隆寺上宮王院、興行戒律、安置僧□、後讓之宝金剛院英舜大德、安置門侶、興行連統」とあり、円照の管領するところとなり、おそらく正安四年（一三〇二）の頃までは「興行連統」の状態であり、「圓学〔覺〕上人雖非受戒弟子、化導興隆、偏投照公門下、仍以上宮王院、付之令興」と記すのである。「徳治三年居^戌五月法隆寺参籠之次／惠巖対面借請此書」とある徳治三年は一三〇八年に当たり、上宮王院である法隆寺東院は円照門流の「連統」管領する頃であつたようである。「法隆寺参籠之次」という表現からは法隆寺そのものではなく「法隆之側」の「上宮王院」あたりに立ち寄つたようなニュアンスである。繰り返すが、惠巖が嘉元三年（一三〇五）十二月二十日に法隆寺東院（上宮王院）において書写している「法隆寺宝物和歌」の撰者は定円で、やはり戒壇院円照につらなるかと推測可能な歌人であり、円照門下信忍へ檀那の宋人より「一庵堂」が施与された靈山院（『圓照上人行狀』による、靈山寺とも）での活躍が冷泉時雨亭文庫藏歌書群の原本影印紹介などで近時明らかになった人物である。ついでに附記すれば、六条行家撰『人家集』所収歌によって定円と洛東草河（川）の

思順との係わりを推測することもできるのであるが、思順もまた思融と並び称された四天王寺勝覺院の住僧として『圓照上人行狀』に次のごとく多くの記述を拾うことができる。

良含・思融・忍空などに肩を並べる弘長・文永の頃の円照門下の有力な学僧のひとりであった。「弘長嘉暦、円珠・思順両徳移住鷺尾、修学顕密、助照公化儀」(5頁)

「文永初暦、於金山院、大行灌頂……勝覺院住持円珠大徳并思順大徳……円珠誦經導師、思順教授」(6頁)

「諱忍空、房号空智、駿河国人也、……即勝覺院円珠・思順両徳東遊之時、相隨上洛、遂入泉涌律場、珠・順両徳者本泉涌寺住僧也」

無住は円照及びその門流に近しく接していたのではないかと、との推定は全くの的外れであろうか、かくして一考の余地はありそうである。

二、八幡大乘院唯心房最盛

米沢本『沙石集』卷二ノ七「弥勒の行者の事」に「八幡山」「清水」の「唯心房の上人」の一話が収録されている。「八幡山に清水と云ふ所に、唯心房の上人として、尊き真言師ありき。広沢の保寿院の流を伝へて、弥勒の行者にて、都率の上生を願ひ、如説修行の上人と聞こえき。行法の時、

都率の内院、道場に現ずるほどの、有相の瑜伽成就の行人なり。中比、縁にさへられて、且く現ぜぬ事ありけれども、また行じて本の如く現じけり。

慈悲深き人にて、伝授も安かりけるまゝに、遁世門の僧共、多く受法しけり。ある僧、真言の志深く侍るが、指したる事ありて関東へ下向す。上洛して伝授の由申しければ、「必ず上りて習ひ給へ。末代なればとて、真言の功能、愚かなる事無し。穴賢、人に披露し給ふな。真言の功能見せ奉らん」とて、舌をさし出ださせて印を結び掛くるに、舌の甘き事、甘露もかくやと覚えけり。さてまた、印を結び、取るやうにする時は、その味はひ失せにけり。また鈴印を結びて振るに、如法にありがたき鈴の声しけり。「これは真言の信のためなり。努々口より外に出すべからず」と能々口堅めせられける。この事、かの同法の僧の知りたる、語り侍り。

文永年中に他界、最後には胎藏の行法して後、鈴は振らず、礼盤の上にして入滅と聞こえき。「弥勒の浄土、常に現ず。内院の往生疑ひ無し」とこそ弟子には申されけれ。臨終の作法、実に目出たくこそ。弥勒を大目と習へば、行法も胎藏にてありけるにこそ。内院に生れて高祖大師をも拝み、弥勒の御弟子と成りけん事、うらやましくこそ覚ゆれ。」(小島孝之氏編・校注『日本古典全集 沙石集』小学館)

無住が満腔の賛辞を連ねた唯心上人であるが、『円照上人行状』にも「八幡唯心上人」が登場し、円照が「八幡唯心上人」に師事、「五部灌頂秘奥」を獲〔窮〕した師として記述される。別の個所で「本流他流无不研究」とし、続いて「真空上人」「聖守上人」「圓珠・忠順両上人」と比肩する一人として「唯心上人」を挙げている。

『円照上人行状』に「石清水八幡」「唯心上人」に係る四か所の主な記述を掲げる。

「法花林中表无表章、大乘義章三聚戒義、巨細研精、无不窮盡、〔對〕覺盛和上、隨良遍上人、受學鑽仰、服膺溫覈、真言秘教專所習學、初隨四恩院淨法大德、受三密法、次隨三輪上人、入兩部密壇、後就八幡唯心上人、獲〔窮〕五部灌頂秘奥、各罄宗旨、俱領淵府、」(頁4)

「正嘉元年丁巳之秋、岩清水檢校法印宮清建立一寺、施入上人、興行律法、号善法寺」(頁5)

「文永四年丁卯之比、以八幡大乘院、興為律院、宮清法印社務之時、即寄料庄、為僧食分、円照上人命門人倫海、為彼上座、海公弘律安僧、興行丁寧、……宮清卒後、建治初曆、倫海棄寺、作他管領」(上、頁5)

「又有尾州僧良敏法師、本学天台宗及真言教、創入上人門下、受戒聽律、有時住善法寺、即命凝然、於彼寺別房、為敏法師、令講四分戒本定賓略疏、又八幡大乘院既付門人琳

海大德、恒講律□□菩薩戒古迹・宗要等、」(頁8)

「以金剛王院為其正流〔本ノ所學〕、〔彼寺所弘ノ事如是故〕、普訪知識、求學秘教、本流他流无不研究、乃真空上人、唯□□〔心力〕上人・聖守上人・圓珠・思順両上人等□□、」(頁10)

しかし八幡大乘院は間もなく、戒壇院系の学僧に付与したが、「不住持」という状態になったことが、「八幡大乘院雖付海公、々々捨之、不住持焉、」との記述で知られる。

「八幡唯心上人」とはいかなる僧であろうか。石清水八幡の大乘院に住した唯心房「最盛」という学僧がいることは既に福島金治氏が指摘している。『金沢北条氏と称名寺』(平成9年9月吉川弘文館刊)によれば、

「唯心は、『血脈類集記』『西院流血脈』には、西院流宏教方の能禪から弘安八年(一二八五)に東寺大悲心院で法を伝授された是本に「是本 是本房、律、八幡善法寺上人、唯心房僧都入室資」とみえ(『真言宗全書』、『続真言宗全書』)、石清水八幡宮門前の律院善法寺の僧是本の師匠でもあった」と紹介された。「本朝高僧伝」には、唯心は石清水八幡の人で広沢流の真言僧、弥勒信仰を中心にし、文永末年に修行中に礼盤に座して往生したと伝える(『大日本仏教全書』)とも紹介するが、これはおそらく『沙石集』の記事に拠ったものであろうか。さらに、「愛媛県西条市

伊曾乃神社所蔵「新居系図」には、越智一族に「唯心房、

律僧、住八幡大集院」とみえ（越智通敏氏『沙門凝然』紹介写真）、東大寺の凝然と近い一族の出自の人物で、石清

水八幡宮大集（「乗」の誤か）院居住の律僧であつた。石

清水八幡宮の僧としての業績には、文永十二年（一二七五）

に『八幡宮寺年中讃記』をまとめており、同社の故実を知

りぬいた僧であつた（『石清水八幡宮史料叢書』四所収、

及び天理大学付属天理図書館所蔵写本）。との記述もある。

おそらく『沙石集』巻二ノ七「弥勒の行者の事」に登場

する「八幡山」「清水」の「唯心房の上人」は、この石清

水八幡の大乗院に住した唯心房「最盛」を指すか、と思わ

れる。しかも、前述の如く八幡の大乗院は「文永四年丁卯

之比」、律院化され、戒壇院系の学僧琳海大徳に付与し「興

行丁寧」であつたが、「宮清卒後、建治初暦」、琳海の手を

離れ「不住持」という状態になったことが判明する。

ところで、唯心は真言の立川流の僧・最盛なのである。

東寺観智院所蔵の『一印験記』次のような奥書があること

も福島氏は指摘している。

「〔記〕東寺観智院金剛藏聖教目錄（一五）。

弘長二年五月八日佛子最盛記之（志水唯心／上人也）

但長寿房犯去之由聞之、

文永三年丙寅八月廿一日、於志水御奄室奉伝受了、忍空

（空智上／人也）

唯心房最盛の弘長二年の撰述書『舍利要文』や「文永三

年丙寅八月廿二日、於志水御奄室」で書写した忍空につい

ては、既に牧野「疑経・仮託などの周辺——『舍利要文』・『大

乘毘沙門功德経』——（『実践国文学』60号 2001・10）、

同『一印験記』の一異本——紹介・翻印——（『唱導文学研究』

5集 三弥井書店 2007・3）他で詳述したので、省く。

唯心と石清水の關係は、文永四年（一二六七）四月に「於

八幡山辺志水房、奉伝授唯心御房了」と隆盛が唯心から伝

授をうけた記事がみえ（『愛染』奥書、金文識三七）、最盛

としてよからう」と伝授に係る資料を福島氏は指摘したの

である。ここで『沙石集』に録された唯心上人の臨終の様

子を彷彿とさせる内容を持った聖教資料がある。釵阿所持

本『宝寿抄』十二巻本がそれである。前田元重・福島金治「金

沢文庫古文書所収『宝寿抄』紙背文書について」（『金沢文

庫研究』270号 1983年3月）の書誌的な事項の紹

介によると、

「釵阿所持本『宝寿抄』は十二巻から成っており、釵阿

は各巻表紙に聖教名と篇目及びその所持を示す己が僧名を

梵字で自署している。又、巻十二の前表紙裏には釵阿自筆

の小文が記されている。各巻の本文の筆蹟は釵阿とは別人

で、各巻書写人が異なっている。」

「本聖教の法量についてみると、『宝寿抄二』の前表紙が原装のまま保存されており、縦十七糎、横二十七・五糎と知ることができ、他巻の法量についてもおおよそこの法量の前後とみてよい。品質形状は綴葉装（各巻は三括り、或いは二括り）、表紙には外題墨書があり、料紙は斐楮交漉で無界、一頁行数・一行字数共に一定せず、各巻により相違がある。」

寺院聖教によく見られる横型の折り紙綴葉装である。

『宝寿抄』の成立から釧阿の書写に至る経緯についての記述が、巻一の巻頭に次のようにある、という。

「此抄廣澤為本、云當流也、□／□交載、故両流書也、於□（奥力）／州岩城郡薬王寺寶寿院禪／弁（改名／禪意）大徳口筆也、真源於座／下記之、故名寶寿抄也、仰付法若寫瓶之仁非不可輒／授与之云々、後葉可能存此旨也、

永仁三年三月始傳授之、

私云、此抄一門即普門習□□（廣澤）／意也、從因果義也、若依小野意／□普門即一門可得意替也／□從果向目之義也／師說如此、

福島氏は「この文言より、陸奥国岩城郡薬王寺宝寿院において、真源が禪弁より伝授されたこと、且つ、これを「宝

寿抄」と名付けたこと、そして、この秘法の伝授の最初が永仁三年三月であることが知られる。称名寺本『宝寿抄』は、円定房真源の筆録したものを、釧阿が転写せしめたものと推定されたのである。さらに「釧阿が称名寺で書写させたものと思われる。又、不動や六字天の白描図像は手馴れた者の筆と思われる、本文を書写した人物とは別人かと考えられる。そして原本『宝寿抄』の借用先は、先述した下総国雲富慈恩寺開山真源の所持のものとみるのが順当ではなからうか」とも推定している。陸奥国岩城郡薬王寺宝寿院にて行われた伝授で最初が永仁三年三月と認められ、真源が禪弁（改名して禪意）より伝授されたものを真源が筆録編集した密教の事相書である。

禪意口・真源記『宝寿抄』の禪意についても、福島氏の博搜によって、次の点が解明されている。嘉元三年（1305）に極楽寺真言院で没、六十五歳（額安寺忍性塔出土禪意正一房骨藏器銘文）。仁治二年（1241）生まれ。弘安三年（1280）に鎌倉甘縄無量寿院で実勝から伝授、禪意は極楽寺真言院長老。『野沢大血脈』に実勝の弟子に「心一上人 白毫院長老 極楽寺真言院坊主」とあることを不審として、福島氏は次のように推定した。ちなみに「心一」は「正一」の草書の誤写か、という。

「禪意は、京都白毫院長老を経歴したのであるうか。白毫

院は金沢貞顕を檀那とする律院で、禅意と静基は兄弟弟子であつた（金文五八五九）。また、禅意は『宝寿抄』卷十の金剛界の房中作法に「先師円光上人」と記し、静基は『密宗血脉抄』を編纂するとともに口伝集『秘抄聞書表題（円光上人良含口説／妙智房静基類聚）』を残し（『東寺観智院金剛藏聖教目録』一九）、円光房良含を共通の師匠としており同様の立場の律僧の阿闍梨と判断できる」とし、さらに忍性によって草創された極楽寺真言院であるが、禅意は永仁五年から嘉元三年の間は極楽寺真言院住持、静基はこの間極楽寺に滞在していること、正和元年（1312）正法藏寺における鋸阿への伝授の印信に「蒙先師白毫院上人灌頂印可矣」とあることなど指摘して、「白毫院長老は静基と確認」された。

「禅意は、二十代に善法寺で最盛から法を伝授された律僧で、室生の忍空と兄弟弟子であつた。また、仁王経法の伝授では「予於三宝院侍此事」と記し（卷九、仁王経）、三宝院で伝授されたと自負している。善法寺・醍醐寺と密接な律僧であつた。」と紹介する。『宝寿抄』の内容について特に卷二は

「卷二 普 文 観付勢至聖観音 弥四行菩薩」
とある。

『沙石集』卷二は次の構成である。

- 「一 仏舍利感得の事
- 二 薬師利益の事
- 三 弥陀利益の事
- 四 薬師観音の利益に命全き事
- 五 地藏利益の事
- 六 不動利益の事
- 七 弥勒利益の事
- 八 仏法の結縁空しからざる事」

この内の、四・七などは、『宝寿抄』の卷二所収諸尊の配置・教義内容と関連する箇所も少なくない。『宝寿抄』の卷一には阿弥陀・釈迦・舍利が配されている。両者の比較などは今後の課題である。

福島氏の紹介によると、

「唯心の弥勒信仰は、卷二の弥勒法に、①醍醐寺の勝憲が臨終の本尊とし、②弘法大師空海の解釈として、胎藏界の大日如来を弥勒と一体とし「都率天ト者密嚴国土也、仇大師都率御往詣り者即大日ノ法界宮也、来入遊化シ給フ自著也ト、東寺ノ一門ハ相待スル也、大師門人、殊ニ弥勒ヲ信スル此意也」と記し、空海の入定信仰の背景に都率往生を考えていたことを記し、③曼荼羅の構成から弥勒と観音を同体ととらえ、「天王寺ノ救世観音ハ如意輪也、云々、彼御足ノ裏ラこ太子富来導師弥勒菩薩ト音給ヘリ、故観音

与弥勒同鉢ナル中」と解釈し、聖徳太子信仰と結合している。空海の入定信仰と弥勒信仰の結合は、『御通告』を典拠に小野の仁海あたりから、空海の弥勒信仰が真言宗内で注目され始めたとされており、唯心の往生の姿は『宝寿抄』の弥勒法に説く①②が結合したものであった可能性が高いと考える。」

唯心の往生の姿について『宝寿抄』の弥勒法に説く①②が結合したものであった可能性に言及している。米沢本『沙石集』巻二ノ七「弥勒の行者の事」に「臨終の作法、実に目出たくこそ。弥勒を大日と習へば、行法も胎藏にてありけるにこそ。内院に生れて高祖大師をも拝み、弥勒の御弟子と成りけん事、うらやましくこそ覚ゆれ。」と結ぶが、現在、金沢文庫閲覧室備付写真を披見して得た限りで『宝寿抄』巻二を簡略に抜書きしておく。例えば、次のようなものである。

「是弥勒観音共補處義同

故一観音与弥勒實同鉢義

アルカ故爾尺也抑先弥勒即大

日云時都率天即八葉中台

藏也疏尺云如在都率陀天宮

藏○右此藏字梵音嚩唎婆

是中心之藏ナリ中台藏之藏ナリ云々

但賢劫十六尊中弥勒東方坐

是別意也金界二ハ西方四親近中

因菩薩即弥勒也此等弥勒与観

音同鉢意也八葉中西北弥勒

又疏尺観音院被合説弥勒今」

金界ノ因菩薩ノ両部全同也大慈

大悲猶如膠深尺可思之」

詳細は別稿に譲る。

三、大円上人良胤

「良胤」という遁世の学僧が鎌倉時代後期に多大な影響をおよぼしていたことについて、「遁世上人」の事績の常として現存する資料類はいたつて乏しい。

勸勝寺大円上人は、顕密の寺院の僧綱の記録には勿論、

円爾門下や南都の諸寺院の圈内にその名を認めることがで

きず、従来の『沙石集』の研究史の視界には入るものの、「説

話」という領域において孤立した形でとりあげられてきた。

小助川元太氏は『行誉編『壺囊鈔』の研究』（平成18年9

月 三弥井書店刊）において『壺囊鈔』のいわゆる〈観勝

寺縁起〉などに関連して、次のように記述をおえている。

「このように、『壺囊鈔』の〈観勝寺縁起〉における『元

『亨釈書』および『沙石集』の引用の仕方からは、それらの書物に大円の事跡が載ったことを誇示し喧伝しようという行譽の意図が垣間見えるのである。

存命中の大円が実際に高僧として有名であったことは事実であるが、約百五十年後の行譽の時代において本尊がせいぜい洛中の三十三所観音に入る程度で、他の有名寺院に比べて極めて売り物の少ない新興寺院の観勝寺としては、『元亨釈書』や『沙石集』に取り上げられるほどの高僧が再興（開山）したという履歴は、他の中小寺院から一歩抜き出るための恰好の宣伝材料であつたに違いない。『観勝寺縁起』が本尊の物語を語るタイプの縁起ではなく、開山上人大円の伝記及び靈驗譚にそのほとんどを費やしているのは、このような事情があつたものと思われる。」（139頁）

また「大円の筆になる宝篋印陀羅尼の功験を録した『沙石集』巻七―二四「真言功能事」を『壺囊鈔』巻七―24条（14―10）の同話と丁寧な比較を行い『壺囊鈔』では「呪符を見てその僧の真価を言い当てる狂女が、大円の呪符にだけは「恐怖ノ体」で拝んだとするが、典拠である『沙石集』巻十末一「靈ノ託シテ仏法ヲ意エタル事」では、「大円の符を見た狂女の態度も「手拳テ拝ミ誠ニ恐怖ノ体」などではなく、「打咲テ」という余裕のあるものである点」など、

詳細に比較分析し、「ここは行譽が意図的に『沙石集』の内容を書き換えたものと判断すべきであろう。」（139頁）と結ぶ（小助川元太氏『行譽編『壺囊鈔』の研究』（平成18年9月 三弥井書店刊）。

梵舜本『沙石集』（古典大系本）を以て引用する。

「観勝寺ノ大円房上人ノ門徒、不断ニ宝篋印陀羅尼ヲ誦シテ、不可思議ノ功能多ク風聞ス。物狂ノ者モ、アマタナリテ侍リケルトカヤ。経ニ廿一遍ヲ誦レバ、百病万悩マデノゾコルト説リ。亡者ノ名ヲ称テモ七遍誦スレバ、極楽ニ生ルトモ説リ。彼上人ノ門徒、アル時女人ノ病患重クシテ物狂ナルヲ、此陀羅尼ヲ誦シケルニ、物ヲツキ出シタルヲミレバ、乃文字ヲ八書テ、其中ニ病者ノ名ヲ書タリ。此病者、サメ／＼ト泣テ申ケルハ、「アナ心ウヤ。仏法ハ人ヲ助給事ニテコソアルニ、我身ヲカクセメ給事ヨ。我ハ京ニナニガシトカヤ巫ナリ。人ヲ呪咀スル法ヲ知テ、是マデ世ヲ渡リ侍リ候ガ、此ノ女房、姉御前ノ殿ヲトリテヲワスルヲ、姉御前呪咀シテト仰ラル、故ニ、此符ヲ書テ、さまざまニ呪咀シテ侍ルヲ、陀羅尼ノヲワシマシテ、我ヲモセメ、符ヲモ責出シ給フ事ヨ。イカニシテ、我身モ度世仕候ベキ。アマリニセメ給フ事ノタヘガタサヨ。慈悲モナキ御事カナ」トゾ云ケル。此事共時同ク陀羅尼誦シテ、タシカニ見聞タル僧ノ物語也。虚誕

アルマジキ人ノ説也。」

加賀元子氏は前掲書『中世寺院における文芸生成の研究』（平成15年1月 汲古書院刊）において次のように述べている。

「此事共時同ク陀羅尼誦シテ、タシカニ見聞タル僧ノ物語也。虚誕アルマジキ人ノ説也。」

と述べていることで、真実であることをとさらに強調している。とくに、波線部分の記述はこの説話が弟子とともに陀羅尼を誦した僧から直接取材したことを示すものである。」と「直接取材」に加賀氏は言及し、「無住は良胤の逸話を「賛辞をもって書き留めており、良胤への尊仰の念」を読み取っている。「こうした話材は、第七—二四「真言功能事」に見えるように、観勝寺僧から得たものであろう。ここに、無住と観勝寺の僧侶との交際が知られる。」と結び、更にその交流についての時期について、「無住が『沙石集』の筆を執る以前、円爾弁円の法門談義を聴聞したころ」と推定し、「円爾の門弟となったのは、『沙石集』卷三八「梅尾上人物語事」によって、円爾の晩年近くと見られることから、四十代末と考えられており、無住五十四歳の折である弘安二年（一二七九）の『沙石集』執筆に先立ち、上洛中の無住は何らかの縁を得て、当時六十八歳であった良胤の住む観勝寺へも足を運んだと考えられる。」とした。

さらに、進めて「良胤の事績を記す無住の筆致から、その人となりへの傾倒が知られる。そこには、伝聞以上の、身近に接することによる深い理解のほどが窺われ、あるいは無住は良胤に親しく接する機会もあったのではないだろうか。」と結ぶ。

しかし、古本系の米沢本『沙石集』卷九—二四（小島孝之氏校注、古典全集本 小学館）は、波線部を「その時、誦する僧、みな驚きあひたり。この事、慥に靈驗奇特なる故、記し置くなり。たとひかくのごとくならずとも、仏法に疑ひをなすべからず。『疑ひをなさば、野狐の身を受けて、永く惡趣に墮つべし』と説けり。」と作り、「直接取材」を読み取ることは容易ではない。

良胤と無住を結ぶ縁を辿り返す手がかりは米沢本『沙石集』において失われたが、無住仮託の書と目されてもいる『妻鏡』を介して無住を大円上人良胤中興の祖とする観修寺に結ぶ応永二十七年の資料が現存する。大円上人良胤と無住を直接に結ぶ資料ではないが、加賀元子氏の紹介に係る西大寺蔵『妻鏡』の本奥書以下に、次の記述を認めるのである。

〔「奥書」〕

斯書則長母開山無住一圓長老之所作也可謂盡善美也転凡

成聖利生方便之直路者歟／應永廿七年庚午八月上旬之候以本初院書了仰（三十二才）

了明房書留之畢如法ミミ殊勝ミミ書也即就右筆未來可披見之由申含畢

〔奥書2〕

應永廿七年八月八日洛東觀勝寺奥坊以／岩藏寺真性院御本写之畢此書尾州／木崎一圓上人沙石作也未世僧侶殊可令／披見事也トテ借給之間不廻時日写之畢／如妻鏡常可見之間名妻鏡云云／金剛乘沙門賴圓判

〔奥書3〕

大永八年戊子弥生中旬之比披見之処依難捨（三十二ウ）／執心不顧惡筆写置者也恥者不為他見之所用事歟

〔奥書4〕

右此書不慮仁令拜見畢然者依有執心之志／不顧惡筆後見之嘲写置処也若披見之／輩者加落字落黙（點力）并〔梵字一字〕字一遍可預御廻向者也／于時永祿三年庚申三月廿八日信貴山藥師堂院内東室／佛子賴弘四五二（三十三才）

〔奥書5〕

永祿八乙丑曆初冬下旬之天不慮仁令拜見／未生己前玄底即身頓悟妙理離言舌所／不及慮智徹心肝不顧惡筆頓書写之畢／後覽客士感微志可披免嘲哂者歟比興々々／大峰修行三十六度 和州（以下八字分墨滅）

（三十三ウ）」（加賀氏前掲書、二三二頁～三頁）

西大寺本『妻鏡』に応永二十七年の「洛東觀勝寺」「岩藏寺真性院御本」を書写した旨の奥識語があることで、一挙に無住と觀勝寺の縁を無住存生期・南都修学期へと遡ることは容易ではない。

しかし、米沢本「その時、誦する僧 みな驚きあひたり」と受けて「慥に靈驗奇特なる故」という記述には、梵舜本「此事共時同ク陀羅尼誦シテタシカニ見聞セル僧ノ物語也」と和らげてひらくこともできる一面をもつ。無住と良胤の接点は、良胤の門下にもひろげて考えてみる必要があるだろう。

実は、觀勝寺大円上人良胤の付法の弟子に尾州僧良敏がいたのである。『円照上人行状』の伝えるところを紹介すると、

「又有尾州僧良敏法師、本学天台宗及真言教、創入上人門下、受戒聽律、有時住善法寺、即命凝然、於彼寺別房、為敏法師、令講四分戒本定寶略疏、」（8上）

「良敏法師、道号寂忍、尾張国人、機字和順、学識深廣、本学天台教觀、乃本州淨心・美州照寂両上人之弟子也、随勸證寺大円上人、習学真言、顯密兼究、講授無休、遂於本國、建寺安僧、多生智人、大興宗旨、後住持洛東吉水別所、」（昭和52・10 東大寺図書館刊）

とある。さらに、多くの尾州出身の弟子を育成したことが知られる。

「禪心房、尾州人也、乃良敏公之弟子、師資同日受戒、文永三年十一月也、寂然房、尾州人也、文永三年十二月受戒」
「覺性房光遍、尾州人也、隨良敏公、学天台宗、覺一房觀海、尾州人也、悟忍房定祐、亦尾州人、音律台宗、多能之芸性、淨達房證円、亦尾州人、上三人並良敏門人、已上四人同壇受戒、文永四年四月也」

「了円房良範、後改興実、奥州人也、隨良敏師、習学真言、……」

良胤は、「本学天台宗及真言教、創入上人門下」良敏の師匠として戒壇院円照に係わる形で、『円照上人行状』に「勧證寺大円上人」として登場する。良敏が弟子の禪心房と共に「師資同日受戒」したのが「文永三年十一月」であった。文永三年（1266）頃に円照の門下として畿内に滞在していたことが判明し、それ以前に「隨勧證寺大円上人、習学真言」したのであろう。弘長年間（1261～1264）に当たるものと推定できる。

「尾州僧良敏」と「良胤—良敏—」という師資相承の血脈から想起される寺院が尾張にある。性海寺である。

「又有尾州僧良敏法師、本学天台宗及真言教、創入上人門下、受戒聽律、有時住善法寺、即命凝然、於彼寺別房、

為敏法師、令講四分戒本定寶略疏、」（8上）

「善法寺」は石清水八幡の善法寺であり、良敏は文永年間に八幡善法寺に住していたのである。文永年間の八幡大乘院には、唯心房上人最盛が講筵をひらき、善法寺の律僧、是本などもそのひとりであるが、「遍世門の僧共多く受法し」ていたのである。また、八幡善法寺は『円照上人行状』に類出する、一時円照が「管領」していた九カ寺のひとつであった。

次の記事は小助川元太氏も紹介する『康富記』嘉吉二年九月十七日の記述である（頁133）。

「晴、東岩藏等日御房有人御、坊主等月上人為尾張国勝福寺塔供養導師、自來二十日有下向、二十四日可行供養大会也、表白事可草進之由、兼日被仰之間、今日書調進入之、また美濃国衣斐寺塔供養事同請招之間、自尾張上洛之時可被供養之、……勝福寺衣斐寺共為岩藏之末寺也」

尾張勝福寺と観勝寺とは本末の関係のあった節がうかがえる資料である。尾張勝福寺について興味深い資料が『清流血脈』である。

「実賢—覺濟—常円—空円—禅海」という師資相承の血脈がある。空円の肩書に「勝福寺上人」と記す。一宮地藏寺開山の空円が「勝福寺」に係る資料であるが、この勝福寺が『康富記』嘉吉二年九月十七日条の「尾張国勝福寺」で

あれば、「岩藏之末寺」であつたことになる。

「中興開山良敏以後の性海寺の住持について「来由記」は、浄胤（第二世）、長恵（第九世）、良円（第三四世）などの名を挙げ、良円まで岩藏の法流が続いたとしている。」（『新修稲沢市史』本文編上〈平成2・11〉頁309）

『雑談集』が嘉元三年（1305）閏十二月二日に万徳寺において既に慈眼によつて書写されていることを考慮するならば、嘉元三年（一二〇五）頃には、万徳寺、性海寺、（勝福寺も）という金剛王院を本流とする、この三箇寺に典籍・情報などの相互交流が鎌倉時代後期に行われていたことが予想されるのである。

「永仁五年十二月五日、於醍醐寺金剛王院／以大僧正御坊御本書寫了、金剛佛子常円／

以先師常円御本、了智空円令書寫了」（万徳寺藏『伝法灌頂三摩耶戒作法』一卷奥書）」

尾州勝福寺が空円ゆかりの寺院で鎌倉期に岩藏観勝寺と本末関係で結ばれた寺院であつた可能性も否定できない。尾張の無住のごく近くにも岩藏観勝寺において大円上人良胤の弟子として良胤と起居を共にした良敏がいた。空円も観勝寺にゆかりの僧であつた可能性がたかい。梵舜本「此事共時同々陀羅尼誦シテ、タシカニ見聞タル僧」は、良敏・空円などを介して無住の身邊に、存在しえたか、或は良

敏・空円がまさにその「見聞タル僧」であつた可能性も否定できない。

土屋有里子氏は『妻鏡』成立考—女人説話の検討から—（『国語国文』892号、平成20年12月）において「ただ西大寺藏本の初期の奥書がいずれも観勝寺におけるものであり、観勝寺が無住自身とも関係の深い寺であつたこと、また時代が下り文安二年から三年（一四五〇）に観勝寺住侶行營によつて編まれた『堪囊鈔』に『沙石集』『妻鏡』からの引用があることを考えれば、観勝寺は無住在世時から後代に至るまで、無住を良く知る〈場〉であり、無住仮託の書が編まれるために適した環境空間であつたことは確かである。」と無住在世時の状況をも視野に入れつつ、「いずれにせよ『妻鏡』は無住の著作とするに不可解な時代的誤差を多く含み、成立も室町期に引きつけて想定するのが最も無理がない」として、『妻鏡』は『沙石集』著者としての無住道暁が人々に意識され著名になりはじめた頃、無住仮託の書として成立したと考えたい。」と結び、無住仮託説の方向性を示した。観勝寺を無住在世時から後代に至るまで、無住を良く知る〈場〉と捉えなおして、改めて文永・弘長頃の無住の足跡を考えてみるべき時期にきているのではないか、と思うのである。

むすび

質量ともに充実した研究史をもつ『沙石集』に対して「円爾弁円への修学期」を重視した評価は当然であり、円爾弁円の教風が「無住」に与えた影響には重いものがある。しかし、『沙石集』執筆の時期は一三二〇年以降に当たり、無住の南都修学期が建長から文永・弘長期に至る頃であることも確かである。

伊藤聡氏が『中世天照大神信仰の研究』（法蔵館2011・1）第三章「無住と中世神道説」に、聖守について『沙石集』十末ノ二「諸宗ノ旨ヲ自得シタル事」を引き、「その身边に取材しなければ知れない逸話を無住が記していることは、かえって彼が聖守周辺との交流があったことを示唆しているといえないだろうか」とし、「聖守とも関わりの深い一人の人物」「真空」についても、「彼と聖守とは、円照ともども東大寺戒壇院再建に奔走した同志」と紹介し、『沙石集』十本ノ十「妄執ニヨリテ魔道ニ落タル事」を引き、結論として次のように述べている。

「聖守の度重なる伊勢参宮や真空の神道説への関与は、建長年間前後より弘長年間あたりであり、無住の南都修学及び伊勢参宮の時期とはほぼ重なる。従って、無住の参宮も、南都周辺の遁世僧・禅律僧たちと伊勢神宮との関係を背景

に考えるべきではなからうか。つまり、無住は南都ゆかりの遁世僧・禅律僧であったからこそ、神宮の秘説を聞く機会に恵まれたのだ。」

『円照上人行状』中において円照の修学について「以金剛王院為其正流（本ノ所学）」、「彼寺所弘ノ事如是故」、普訪知識、求学秘教、本流他流无不研究、乃真空上人、唯□（心カ）上人・聖守上人・圓珠・思順両上人等□、（頁10）と結ぶことの意味は、『沙石集』にとって重い。本稿は、唯心上人などを採りあげたが、圓珠・思順両上人については、別稿に譲ることにする。

『七天狗絵詞』のかなりの局面・延慶本『平家物語』の加筆編集などのある局面・『沙石集』の情報蒐集の多くの局面などを考察するうえで、弘長・文永頃の東大寺戒壇院系の遁世僧（上人）の「活動」「交流」などの資料的な切片は極めて貴重である。

円照上人の足跡をたどれば明らかであるが、円照は円爾弁円の傘下に門下僧を卒して参じ、叡尊の許へも修学に赴いており、入宋僧の円爾・叡尊の影響は円照及びその門下にも顕著である。しかし、家原寺の思融、白毫院の円光上人良含、室生寺の空智上人忍空などの許に、多くの学僧が参じており、戒壇院系のネットワークは講筵などの場を移して機能していたのである。無住が弁円の講筵に列し忍性

東下に際して赴いたことも、無住が菩提山正暦寺などの南都修学に精励していたことを打ち消すことにはならず、相変わらず南都周辺の戒壇院系周辺のネットワークは生きていた、と考えるべきであろう（菩提山正暦寺は、戒壇院系の学僧が足跡を残したことも知られる）。

金剛王院流実賢の法流を「本流」（小林直樹氏「無住と金剛王院僧正実賢の法脈」〈『説話文学研究』44号2009・7〉参照）とする、横に「緩やかな」師資相承のシステムは、無住においても相変わらずに脈々と引き継がれていたことを『沙石集』は端的に示している。

後ろ盾する檀那と個々の上人との関係で成り立ちえた「院・堂・庵」などは極めて脆く、檀那の意向次第では、寺院の消滅、聖教類の散逸（結果として現在のいわゆる紙媒体の「欠逸」）によつて「すべて」が消える。遁世僧も僅かに他の顕密寺院などに残ることをえた印信・血脈などに經由点としての「名」を留めるばかりということになる。そして「欠逸」という存在感を弥々増すことになるのである。慶政や真空・思融・思順など、鎌倉期における令名（血脈などに經由点としての令名を数多く残した）の高い学僧（遁世僧）の「欠逸としての」事績の解明は今後も大きな課題として残るのである。

『円照上人行状』に記された学僧のひとりひとりの足跡

をたどる時、ここにもまたひとりの「無住」がいるという錯覚に陥るのも故無しとしない。

日本における〈国文学〉の、いわゆる中世は、「僧綱」並びにその周辺の記録に漏れ落ちた、いわゆる「ゆるやかな」法流授受（「和合」ということばと連関）の「事例」の膨大な「欠逸」を、内部に抱えているのではないか。本稿は、「欠逸」という存在へ向けての、ささやかな発掘であり、その着手でもある。

* *

本稿入稿（2011・12・8）後、「思溪版大般若波羅蜜多經・沙石集―渡辺氏への報告」と題した発表を行った（水門の会・東京例会、於大東文化大学、二〇一二年一月八日）。文応・弘長・文永頃の円照の有力な檀那のひとりに徳大寺実基がいることを『円照上人行状』に確認するとき、『徳大寺実基政道奏状』で後嵯峨院の諮問に應えて、申し入れた一条「国利を量り、仏法を紹隆せらるべき事」において仏法の「三学」の重視、「南北碩徳等」の恵学偏重の批判を厳しく展開していることは、徳大寺邸における遍融の活動の一端が知られる点と併せて興味深い。発表冒頭に右の一点を指摘したことを附記する。

（まきの かずお・実践女子大学教授）